



中尊寺金色堂

住まいとは何かと問われて、一口にはこたえられない要素がある。住まいを象徴するものは何か、という問いにはどうだろうか。家族と答えられるとあまいになつてくる。家族は家で生まれ、命を閉ざすと家と別れる。しかし、現在の家は生と死から消失しつつあり、社会や地縁から縁遠くなつて久しい。

私に家の象徴は何かと問われれば、迷わず仏壇と答える。さりとて仏壇があつても、熱心な仏教者というのではない。現実には宗

暮らしの象徴

# 住まいの物語 16

## ～仏壇のはなし～



教を超えて生活に入り込んでいるようだ。理由は分からないが仏間に座れば心が安らぎ、先祖とひそかに対話できると教わつた。

### 仏壇の起源と普及

《日本書紀》には天武天皇の時代に「壬申に召したまわく諸国の家毎に仏舎をつくりて、すなわち仏像を置きて礼拝供養せよとのたまふ」とある。これは壬申の乱(六七二年)という古代最大の戦乱を制して登場した天武朝が、仏教を国家的理念として中央集権化してゆくプロセスを物語っている。

初期の仏教導入を積極的に推し進めたのは、有力氏族であった。在来固有の氏神信仰と結びながら、仏に一族の安寧を祈願する氏族を建立(五九三年頃)した蘇我氏が、仏教隆盛の中核となつていくのである。つまり仏教は伝来の当初から祖先崇拜と極めて密接に結びついていたといえる。

祖父は、家族を仏壇の間に集めた。仏壇を背にして一族の意見を代表して伝える形をとつたから、その一語一語には迫力がみなぎつていた。

いま和やかな団欒の場があつても、厳しく向き合う場が失われてしまひ、家族のすべがなし崩しになつていく。かつての仏壇の間は、一家経営の大切なコミュニケーションの場として機能していた。

近年の住宅で仏壇の間は、設計のテーマにもならなくなつていく。それどころか床の間、和室すら姿を消しつつある。これら住まいの変化と家族の絆が細くなりつつある現象は決して無縁ではないだろう。

### 仏壇の間の機能

大切な決め事をするとき

復たさせたい 家族の絆

置するための須弥壇をいうが、仏像、経巻、位牌、舎利塔などを安置する。通常木造漆塗りの櫃で上部は屋根、下部には台座が付く。在家領土の浄土宗が自木本願の色彩が強いのに対して、下層農民の真宗は念仏さえ唱えれば救われるとあつた。浄土宗の仏壇は黒の漆仕上げが多いが、下層農民に普及した真宗は、

あるコミュニケーションンスペースは必要であり、工夫次第では整えることが出来る。古くさいと言われるかも知れないが、家族の絆を強めるために一家の大黒柱の復活は必要だ。そのために先祖の威光を背にするのも決して悪いことではない。(文責 木原 伸雄 ※参考文献 中川武者「日本の家」)



太宰治記念館にある仏壇

かつての家族社会では、葬儀も法事も慶事もそれぞれの家で営まれていた。いまではふるさとの集落でさえ命のあやとりをする場所がなく、先祖の魂



木原家の仏壇

が帰る場所はない。仏壇の主人公は仏像ではなく、亡くなった人の位牌である。わが家ではお盆集まり、お灯明や線香をあげ、先祖を迎えて対面する。仏壇は先祖崇拜の意味を教え、厳かな対話をもたす。仏壇の間は家族の時と個人の時を見事に結びつける装置である。家の中心にあつて過去の人、現在の人、未来の人を結びつける役割を果たしている。

住宅事情の厳しさからペースにゆとりが持たず、仏壇の間など望むべくもない。さらに核家族が進んでいるが、もしも二世三世代が住み直される時代がくれば、日本人の勝れた生活習慣が、仏壇の間と共に復活するの夢ではない。それが望めないとしても、一家の重大時を決する権威

金箔をあしらつたきらびやかな仏壇が多くみられる。きわめて分不相応と思えるが、その普及は島原の乱(一六三七〜三八八年)に端を発した徳川幕府の宗門改革の制度と無縁ではあるまい。家に仏壇のあることが仏教徒の証になつてきた。こうして仏壇は劇的に普及し、新しい家族文化を構築したと推察できる。



天竜寺

**第一水曜日「生涯学習」は新ステージの開幕です**

# 映画で楽しむ日本の名作シリーズ

① 十二月二日	夏目漱石のころ	夏目 漱石
② 二月六日	婦系図 湯島の白梅	泉 鏡花
③ 二月三日	野菊の如き若かりき	伊藤左千夫
④ 三月二日	ビルマの豎琴	竹山 道雄
⑤ 四月六日	陽のあたる坂道	石坂洋次郎
⑥ 六月一日	炎上	三島由紀夫
⑦ 七月六日	笛吹川	深沢 七郎
⑧ 八月三日	お琴と佐助	谷崎 潤一郎
⑨ 九月七日	浮豆の踊子	川端 康成
⑩ 十月五日	雪国	川端 康成
⑪ 十二月二日	雁	森 鷗外
⑫ 十二月七日	坊っちゃん	夏目 漱石

長期的なことを考えないと、目先のことでよくよくなる事になるのだ。